

足立健康友の会

かばら支部ニュース

第45号
2012年4月19日
☎: 3605-5594
<http://kabara-tomonokai.kenwa.or.jp/>

お花見会開く参加33人 満開の桜のもとで

4月7日(日)東綾瀬公園で、恒例のお花見会が開かれました。

昨年は東日本大震災で被害に合った人たちのことを考えて、お花見会を自粛しました。寒さのため桜の花が中々咲かないので心配していましたが、7日は、少し風が吹いていましたが、ほとんど満開になりお天気にも恵まれたくさんの方が参加されました。(0歳から85歳まで33人の参加)今年こそはと待ち望んでいたのが皆さん本当に嬉しうでした。

“お手製の一品料理の持ち込み大歓迎”のチラシを見た方々から色とりどりのお料理が持ち込まれ所狭しと列べられました。あらめの煮物、えのきの肉巻き、おいなりさん、ポテトサラダ、ししやものからあげ、ぬか漬、



椎筍の卵焼き巻き 等々でどれもみんな人生の達人たちのお料理、美味しく健康的なものばかり、健康友の会の名にふさわしいお料理の皿が次から次へとまわってきます。何と豊かなお花見でしょう。

医療(看護)・介護相談会
毎月、第3木曜日10時
どこで 小児科診察室

普段、受診しても先生と相談する時間がなく困っていること・わからないことなど相談ができます。

5月は17日10時

自己紹介のなかで、初めて参加した年配の女性は、中々家の外に出る機会が少ないので、こんなステキな会に誘って頂いてありがとうございますと言っていました。又、健康講座(健康食のお話)に参加して、ダイエットを始めて7キロ痩せましたとの報告された方もありました。健康講座、お役に立って嬉しいです。

職員の方も高先生、望月先生をふくめて6人の方が参加。高先生からは日本酒(栄川)の差入れを頂きました。美味しかったです!

被災地でもこれから桜の花が咲くことでしょうか。今年のお花見は参加したみんなが各々に被災地の方々のことを想った思い出深い花見会となりました。又来年もお花見会が開けると良いですね。

報告 清水 扶佐子

「オーロラを見たよ!」

「オーロラをみに行かない、一生に一度見られるかどうかだものフエアバンクスに直行便が出るから安く行けるよ」との姉からの電話。BS番組でいろいろ見ていたので是非オーロラに巡り逢いたいと思っておりましたので参加することにしました。

しかし、あくまでも自然現象、見られるかどうかは運次第?

では、オーロラはどのような時に現れるのか。それは太陽の黒点の爆発が多くなると太陽から粒子が飛び出し地球の極地にオーロラが発生する。簡単に言えばそう言う事なのです。2011年の太陽の活動は?活発でした。チャンスです。さて参加することを決めました。

に到着。着。さす。がア

アメリカ、入国審査は十本の指全部の指紋をとられ、ボディチェックも厳しいものでした。オーロラは空気が澄んでよく晴れている夜に見ることが出来ます。四晩通って二日目の夜、緑色の雲が竜巻のようにスーッと湧き立ってきて、それが帯状に幅を広げて輪になり、微風によってカーテンのようにひだを作ります。降るほどの☆、光々と輝く月、三百六十度オーロラに包まれている、うおーと感動の音が湧きつづけて厚い手袋をした拍手が起きました。何も遮るものがない山の上、最高の場所で最高のオーロラに巡り会うことができました。この感動はたぶん一生わすれない!

報告 渡名嘉 史子



の、の、行く先は北極圏のアラスカ、さぞ寒からうと準備万端。アラスカ

看護婦さんと生活習慣病の 誕生月チエックに取り組む

私は蒲原診療所が1963年に開設して4年後、四ツ木診療所より事務主任として転勤してきました。

蒲原診療所50周年・かばら歯科診療所30周年 第2回 坂本節子さん (元蒲原診療所事務長・健和会退職者の会)

当時の蒲原診療所は松永昂先生が所長で看護婦長は矢島登紀子さんか大越弥生さんのどちらかですが、記憶が定かではありません。その後、婦長は竹ノ内つ子さんにバトンタッチしました。事務長は渡辺病院と合併後だったこともあり、渡辺病院の渡辺宗治院長の長男である巖さんで事務職員は7人いました。毎月、



田んぼの真ん中に建てられた大看板
まだ14～5年前の話なのですが……

月末から8日迄の保険請求は、そろばん片手の手仕事で時に徹夜をすることもありました。診療所に徹夜で泊まり込んだ時、当直の看護婦さんが、古い診療所の板階段



当時はバラックのような建物でした(昭和40年)



蒲原診療所 (昭和55年)
●足立区東和3-4-15 ☎03(3605)5594

を音を立てないように上り下りしてくれ、気を配ってもらったのを今でも思い出します。働く女性は心やさしく美しいと思えました。老人健診が始まったころ、早期の発見・治療が大事と中川地域には宣伝カーを繰り出しました。後に友の会蒲原支部の副支部長になる小堀明久さん(故人)や老人クラブの会長さん(故人)から応援を受け、大いに励まされました。「病気がみつき、でも治療が……とお金の心配をされる声が聞かれる中、1969年には美濃部都政のもとで「老人医療の無料化」が実現。高齢者が安心して治療ができるようになりました。今はまた有料化され残念です。

1971年に東和2丁目にあった開設時の診療所が同じ3丁目の現在地に移り、19病床の新築診療所として生まれ変わりました。その年は私の長男が1歳の時で、同僚の今井今朝子さん(元区議会議員の今井重利さんの夫人)も子育ての真最中。職場のみなさんから子育ての支援を受け、仕事と両立できたことは大きな喜びでした。その当時の医師体制は内科の片山靖男先生、小児科の猫宮好朗先生が常勤として診療に当たっていました。その後、両先生とも開業して医師体制では苦勞の連続でした。

1974年に私たちの法人である「友和会」と柳原病院の「柳栄会」が合併。三浦聡雄先生や吉沢敬一先生が続けて着任されチーム医療が軌道に乗り、新しい医療法人である健和会のありがたさを身にしみて感じました。

創立記念事業準備委員会が発足

三浦先生が所長の時、市民医科大学が開かれ第1回目の課題図書がキューブラロス女史の「死ぬ瞬間」でした。彼女は末期癌患者にインタビューを繰り返して「死に行く過程」を5段階にまとめ上げました。

その頃はまた、ガン患者へ告知はしない世相でしたが、彼女は告知して病を受容するまで、その人に寄り添っていく大切さを感じました。

その後、宮崎康先生の糖尿病専門外来も始まり、診療所の診療内容も充実してきました。その患者会もでき房総白浜へ一泊旅行したことも楽しい思い出の一つです。

また、看護婦さんと一緒に生活習慣病の誕生月チエックに取り組み、患者さんの管理システムを確立したことも良かったと思っています。

私は1980年に柳原病院に異動になりましたが、それまでの13年間、蒲原診療所では共に働いた仲間の皆さん、友の会のみなさんから励ましを受け、頑張り続けることが出来ました。その意味でも蒲原診療所時代のことは今でも感謝の気持ちでいっぱいです。蒲原診療所はこれからも地域になくしてはならない医療機関として皆様の役割を担って頂きたいと思っています。

4月19日夜、蒲原診療所50周年、歯科診療所30周年を祝う準備委員会が発足しました。この準備委員会は「記念式典」「記念誌」「文化行事」の3つのプロジェクトに分かれ、来年の3月に予定されている創立記念行事の準備に取りかかります。